

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和2(2020)年
12月号
通巻604号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和2年12月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷^株
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



チッソ水俣工場の廃水がたれ流された百間排水口 F I W C関西委員会 青山哲也さん撮影 (劉成道さんの文・5頁)

昭和41(1966)年12月23日 降誕祭法話より

自分の行くべき道を知らず知らずに歩んでいる

法主 矢追日聖 (満55歳)

満五十五歳を迎えて

今日は非常にお天気も良うて暖かうございます。私個人の誕生日を、こうして皆さんからお祝いして頂いて心から感謝申し上げます。

十二月二十三日生まれですと、満と数え歳は二年の開きがあるのでややこしいのです。子供に聞いて明治四十四年の十二月生まれとして勘定してみると、満五十五歳でまあ間違いないらしい。まだ五十五歳かいなと昨夜思ったようなことです。何とか五十五まで生き延びさして頂きまして、我ながらおめでたいと思っております。

持って生まれたお役目

私一人だけじゃなしに、皆さん方の場合も同じだと思ふんですが、それぞれに持って生まれた役目というものがございませう。それはお互いに分からないだけであつて、分からなくても自分の行くべき運命の道を知らず知らずに歩んでいるんです。

特に私は神さんの道とか宗教とかのお役目を頂いておりますので、普通の人より生まれてきた因縁や理由、また自分が一生何をしていくべきかということをも自分自身で分かっているんです。

それが分かったのは私が十五歳ないし十六歳の時です。昔で言えば元服という年頃ですね。その時にもう、一生やって

いかなければならないことが分かってたんです。けれどもあなた達も十五、六歳頃の自分をお考えになったら分かると思うんですが、分かっておりながら、そうだとかなかなか信じることは出来ないですね。

目に見えない心の世界がある

どういう形で分かってくるかと言うと……。我々人間の肉体を持って生きておる世界と、心の世界は別だと思っんです。もっと身近に言うると、適当に寝て、飯食うて水飲んで運動していけば肉体の場合は健康を保って頂けます。けれども、その中でモヤモヤと動いておる心や精神というものは、また別の世界なんです。

今あなた達の肉体は大倭のことで座っていますけど、頭の中でふと自分の友達のことを考えてみたり、宗教的な話をすると世間の宗教のことに気持ちが飛んでもうたりね。心の生活、心の世界では瞬間瞬間に色々なものが出てくるわけです。そういう心の生活と肉体の生活という両方を、あなた達個人の場合でも持つておるんです。

これをもうちょっと大きくして言えば、肉体を持つて生活している人間の世界と、肉体の無い靈魂だけが住ましている世界があるんです。我々は現象界で肉体を持った人間の世界で生きているので、肉体の無い靈魂とか心だけの世界に住んでおる人間の世界は、あなた達ではちょっと分かり難いと思うんです。

これを昔から霊界とか神さんとか言うていられるんですけど、分かる者には分かるし、分からん人にはいくら説明しても分からない世界なんです。

私は事の成りゆきで言わざるを得ないんですが、あなた達は信じる必要もなければ疑う必要も

ない。疑うのにも疑う根拠、信じるにも信じる根拠がなければいけないんやからね。矢追日聖という氣遣いが訳の分からんアホなこと言いと、話だけ覚えておいて下さい。死ぬまでの一生の間に、何かにつづった時に思い出しづらい。

そういう我々の肉眼では見えない、肉体を持たない人間が集まって生活している別の世界があるんです。その世界では百年前でも、五千年、一万年前でも、皆同じ世界に住んでいるんです。

あなた達も肉体が死んでしまうとみんな靈魂の世界に行くんです。その時になったら、矢追日聖という人は本当のことを言うてくれていたと分かるんであって、今はまだ分からなくて普通です。

肉体は借り物である

私は明治四十四年に肉体に宿ったんですが、この肉体は借り物なんです。もし自分の物なら、この肉体で百年生きるつもりで百年生きるんやったら分かるけど、匂が来れば肉体は勝手にだんだんと死んでいきますね。親も借り物だし、自分の物、我が物というのは殆どこの世に無いんです。

自分とは一体何かということをよく考えた場合、もう息が切れる瞬間になっても、まだ生きていたと思う心、それが肉体を借りて入っている自分なんです。

そういう肉体の無い世界におった時の、私の友達や仲間がたくさんおられます。あなた達でも、サラリーマン同士とかお金持ち同士とか、人間対人間の交流や結び付きは何かしら似た者同士が、類をもつて自然に集まるんです。だから霊界でも、餓鬼の世界では餓鬼の仲間、畜生の世界では畜生の仲間というようになってるし、私にも似たりよったりの仲間がたくさんおるんです。

お役目に対する葛藤

魂が一旦肉体に入ってしまうと、五感や脳の知識がありますから、霊界におった時そのままのことは分かり難いんですね。私は肉体を持って人間として生まれさせてもらったけど、霊界の仲間達が私の十五か十六歳くらいの時に出てきて、お前はこんな役目でこの世の中に生まれてきたんやぞと、色々教えてくれるんです。

ところが頭や心が発達して、知識も物の考え方もその年齢相応になるので、霊界から言うてこれでも、ああそうですかと素直に信じられへん。というよりも、自分自身は氣遣いやなど思うのです。

今のこの歳になって色々な経験を積んでくると分かりますけど、まだ十五、六歳の前途遼遠な若い時に、お前は一生宗教でいかなければならない、霊の世界と人間の世界との中間に立つてその交流をはかっていくお役目なんだと決めつけたように言われますと、意地からでも反抗したくなって。誰だつて分かるでしょ。

霊界人が出てきてそんなことを言われてね、信じられる人は頭がどうかしているんですよ。私もその頃は氣遣いかと思ってました。常識もあるし、しっかりしてるんですからね、そんなアホなことは全面的に否定しとつたんです。

宗教と考古学との狭間^{はざま}で

ところが反抗して自分の思惑で物事をやってくけど、霊界人が出てきてこっちの考え方がひっくり返るように邪魔しよるんです。

例えば、私は否応なしに宗教の学校に行くことになりまして、当然、宗教関係の本を開くんです

が、霊界人は読ませてくれません。どういふことかと思議に思うでしょうけど、一頁でも読むと目玉の裏を針でつつかれるように痛くなつてくる。それでも本を読めなくなつて止めてしまふ。しかし学校へ行つたらやっぱり勉強もせにやいかん。宗教は心の問題が主な唯心的な学問ですけど、全く裏表正反対な、物を中心とした唯物的な考古学を勉強しました。古代の遺跡とか遺物とかを通して過去の人類の文化を研究するんですが、物的証拠の裏付けが無ければ絶対に物を言えない学問なんです。

宗教であれば自分の心にふと瞬間的に閃くことで話もできる。あるいはまた文学であれば詩人のように心の在り方・感覚によって詩的生活もできる。けれども考古学は現物を持つてこなければ、ここに物があるとは言えない唯物史観が徹底しておるんです。普通の文献の学問よりもまだもっと堅苦しい。古文書があるとしても、人間というのは都合なことには嘘を書きよるんで真実であるかどうかの証明にはならないんです。

私のように宗教でいく宿命を持った者が、現物がなければ絶対に物を言えない唯物主義的な考古学という学問をさせられた。六年間大学におつた間に考古学ばかりで、宗教は何も無し。考古学の本であればね、徹夜して読んでもどうもないんです。

私とすれば霊界人が言うから一生宗教でいく潜在意識はあるんです。だから一応現界の宗教はどんなものか知りたい。人の説にも触れたい。知識的な意欲もあるんで、それこそコーヒー一杯飲むのも節約して宗教の本をたくさん買ったんですけど、手垢ひとつ付いてません。今でもかなり宗教の本があるんですよ。まあいつかはまた役に立つんやろと思うんですけどね。

霊界人は肉体の無い仲間

今になって考えてみれば、仮に私が宗教の本を読んだ場合、本当の宗教というものが掴めないで、ありきたりな宗教の知識がまず頭に入るんですね。そういう固定観念があると、霊界人が私に色んなことを言ってきたても、知識で撥ねつけて素直に受け取れない。そういう弊害があるから読ませてもらえなかつたと思うんですよ。

だから宗教のことについては、全然白紙です。霊界人との交流によって、ということは私が霊界におつた時の仲間が、大倭の宗教はこうしなければいけないということを私に言うてくるわけなんです。

こういう話の仕方だと、何か柔らかく感じるでしょう。それを世間の人は神さんと言うんですけども、私からすれば神さんとは違うんです。仲間なんです。みんな仲間。

自分というのは、肉体を持つておつても持つていなくても同じことなんです。人間界では矢追日聖という名前を貰つてこんなふう喋っているだけであつて、そこに私としてのお役目があります。しかし死ねばまた、元の霊界の仲間達と一緒に仕事をしていくんです。

大倭教には何も無い

私自身は宗教ということをあまり問題にしません。大倭教というひとつの教団の名前にしておりますけど、大倭教には何も無いんですよ。矢追日聖という人間一人の心の中に全部あるんです。それ以外にどこにも無い。

その大倭教も私が作つたんじゃないんです。霊

の世界にいる私の仲間達からの教えです。千年を経た人も、一万年・五万年・十万年を経た人もいる。そんな仲間が色々とか、昔の神さんの道というのは本当はこうなんやとか、今はみな間違つとるとか、こうせにやいけないんやとか意見を出してくる。それを人間界でみんなを代表して実行している。私はロボットみたいなもんです。

だから大倭教と言うたかてね、私は何も知らない。私が作つたものでも何でもありません。霊界の昔の人達から今現在への色々な要求があつて、私が素直に実行しておるんです。

前の世からの結び付き

また生きている人間の中にも、過去世についての縁によって、私の昔の仲間が生まれ変わつてきている場合がたくさんあります。例えば先生と弟子というような結び付きによって出てきている者もおるし、あるいはまた同じ家で生活しつた人、掃除したり飯炊いてくれた人とか、色々な縁がたぐさんあります。

生まれ変わつてない人もまだ霊界にはたくさんおつて色々な要求をするので、それを私が聞いて、現在の社会において素直に実行していくという役目があるんです。

だから大倭教として十万、百万の信者を作つたりすることは目的ではないんです。ひとつの枠をこしらえて信者を作るといふことは、神の心に逆らうと霊界人は言うんです。だから、ここには何もありません。

前の世から、またそのもつと前の世から、お互いに色々罪を作つては人間界に生まれさせてもらつてるんやな。だから、そういう古い古い縁によって大倭に集まつてくるのが神ながらなんです。

そして矢追日聖という私が今ここに生まれてきていますから、私個人と前の世、またもう一つの前の世というように何回か転生して行く中で縁のある者が、現界にみな集まってくる。

だから大倭教はありがたいから信仰せい、ご利益があるから信者になれというのは邪教やと、霊界の人は言うんです。そんなことして集まってくるんじゃないに、結び付きのある者が自然に勝手に寄ってくるんやと、それがここで言う神ながらの究極です。だから大倭は私の生き方として肚にあるんです。

霊界からの厳しい監督

私は信者を一人でも増やそうとか、そういうようなことは絶対考えていません。そんなことをやったら私は生命がないんです。私のたくさんおる霊界人の仲間が承知してくれませんか。もし生まれてきた自分の使命に逆らうようなことをした場合、私は肉体を碎かれて霊界へ戻されます。

ところがそういうことをしている世間の宗教家や既成宗教がぎょうさんあります。どこも信者が増えて大きくなっているのが現実ですが、それは私のようなお役目を持ってないからいけないんです。霊界との結び付きが薄いからそんなこと平気でやっていける。その代わりまた死んだ時に、霊界でカツと取っつけられるだけのことです。

もし大倭でそういうようなことをやればね、一番肝心の本家本元の私自身の命が無いですよ。瞬間的に心臓をキュッと捻られて死んでしまう。また私が道を歩いている時に自動車の運転手をクラクラさせれば当てられて死んでしまう。霊界人というのは人間の頭をキリキリさせることくらい簡単なもんです。タヌキ一匹でもそんな芸当やりよ

んねんからね。

だから大倭の先生は何をしてるんや、あれは偽物だと、なんぼ悪く言われても構わないんです。もし霊界の心に反する行為が私自身にあれば、こうして滅多に生きてられないんですからね。これはみんなの前ではつきり言える。

私の人間としての生き方においては霊界からの厳しい監督があるんです。

死んだ時に分かること

私の場合、霊界と現界とを結び付けてゆく役目がある、肉体を持っておる人間として現界に出てきております。大倭の霊の世界の中において一人だけ抜擢されて生まれてきているんです。

霊の世界で苦しんでおる階層の人、いわゆる地獄に落ちている人がたくさんおるんですけれども、その人達の救済は霊界人同士ではできないんです。現界に生まれてきた人の霊気によって、霊界は浄化してゆくんです。だから霊界人もそれを望んでおります。

私が霊界を浄化した場合、その浄化された人は必ず何らかの縁故者のところに人間として生まれ変わってきとるはずなんです。それでまたいつか大倭と縁を結ぶような結果になってくるんです。これはだいぶ自惚れた、ちよつと頭の巻いている話になるんですけどね。

そういうお役目で私は生まれてきておるが為に、仮に信者をたくさんこしらえるやり方してみたり、またお賽銭を多くもらえようなことしたり、あるいはまた治らん病気ででも信心したら治らんやと嘘で騙して人をかき集めたり、そういうことをやると滅多に一週間、私の命はありません。絶対に生きてられない。それは今日までの過去の

経験から私は断言するんです。

これだけ厳しい監督の下に、霊界の意志を現界に伝えてゆく役目を持った者はおそらく私一人だけだと思っんです。これはえらい大風呂敷かも知れませんが、霊界を分かっておる人からすれば私が言わなくても分かってるんです。

矢追日聖というのはこんな大風呂敷を広げた自惚れたこと平気で言う気違いやということだけでも構わない、あなた達の耳や、心の中に残しておいてもええたらならば、その縁によって、今度はあなた達が死んだ時に初めて分かつと思うんです。

「奈母太加天腹」という言霊

そして(あなた達が死んだ時に)、霊界でね、矢追日聖が現界に生まれてきたその霊波長との因縁によって、お互いに交流していくようになった場合、その合言葉は、「奈母太加天腹」という言霊です。これは挨拶なんです。これ言うたら助かるのと違います。おはようと言うのと一緒です。

ただ、あなた達が「奈母太加天腹」と言えば、矢追日聖という(肉体を持つ)人間の言霊の中に霊波が乗っていつて、縁の繋ぎ合わせによって助かっていく、昭和の現在においての神さんの意志によって救われていくというような、そんなちょっと面白いことになっていくんです。

これはあなた達も霊界に行かないと分かんないんですが、そういう意味で今世、私は生まれてきております。できる限り一人でも多く心安い人達を作って、人間と人間裸でね、気持ちと気持ちと、本当にこう手を結んでいきたい。

宗教はどうでも構わない。あなた達と私が個人対個人、心安ういこうやないかというのが私の念願です。

こもれる魂魄の地を訪ねて(第51回) 松永弾正久秀

兼田 隆

数十年前になりますが、奈良に所縁のある松永久秀の關係地をあちこちと訪れた事があります。今年は大河ドラマ『麒麟がくる』で俳優の吉田鋼太郎さんが演じておられ、ひそかな脚光を浴びています。

松永久秀は優れた戦略家であるとともに茶の湯を好む文化人としての側面も持っていますが、下剋上の代表的な人物として北條早雲や齋藤道三と並び、戦国の三悪人の一人とも言われております。当初は三好長慶の家来として頭角を表しますが、長慶の死後は織田信長に属します。

ある時、徳川家康に久秀を対面させた時の話です。信長が「三河殿(家康)はこの老人(久秀)をご存じあるまいが、これは松永弾正と申し、世上の人のなしがたき事を三度までした仁である」と紹介したと言います。世上の人のなしがたき事とは、足利十三代將軍義輝を殺害、主家三好家を乗っ取り、奈良の大仏を焼打ちした三大悪事のことです。久秀はどういう気持ちでこれらの事を聞いたことでしょうか。

松永久秀の最期は、打倒信長を表明する上杉謙信と呼応して信貴山城に籠り、反旗を翻しますが、謙信は上洛出来ず、久秀は城を囲まれ孤立します。信長は「天下の名茶器、平蜘蛛の釜をゆずり渡すなら、助命する」と交換条件をだしますが、久秀は城を枕に茶器もろともに爆死します。虎は死して皮を残し、人は死して名を残すと言うように、久秀は奈良を中心に徳島、京都に魂魄の地を残しています。



徳島県阿波市市場町犬墓にある松永城跡は誕生地の地と言われており、現在、遺構は何も残っていませんが、石碑のみが民家の前に立っています。京都市下京区堀川松原には久秀の京都屋敷跡があったとの伝承があり、現在、妙恵会総墓地の真ん中あたりに松永久秀と長男久通・次男久次の墓碑があります(写真①)。

生駒郡三郷町立野北の立野簡易郵便局横には松永久秀の供養塔があり、地元の有志の方々が久秀を顕彰し供養するために建てたものです(写真②)。伝承により、信貴山城で爆死した久秀の首は安土へ運ばれ、遺体は北葛城郡王寺町の達磨寺に埋葬されたと伝わります。この寺では毎年10月には久秀の命日法要が営まれます(写真③)。

松永久秀の居城、多聞城跡の主郭は奈良市立若草中学校の校域にあり「多聞城跡」の石碑があります(写真④)。奥には多くの石仏がおかれています。多聞城には大きな長屋形式の櫓が存在していました。その櫓を「多聞櫓」と呼び、その名称と形状が、後の城作りに繋がっていきます。松永久秀の最期の地である信貴山城は奈良と大阪の県境にある生駒山系に属する信貴山(標高433m)山上の朝護孫子寺の境内地に築かれた山城です。山上には「信貴山城跡」の石碑があり大和盆地を見下ろす絶景ポイントでもあります(写真⑤)。昨今、信貴山城址保全研究会により、松永久秀屋敷跡付近も、かなり整備されており、訪れやすくなっています。

「平蜘蛛の釜とわしの白髪首の二つはお目にかけたくない」。松永久秀の辞世の言葉です。

F I W Cスタディ・ツアー 相思社を訪ねて学んだこと ～はじめての水俣旅行～

ユウ オウ
大阪市 ソンド 成道



私たちがF I W C関西委員会メンバー、総勢8名は9月25日から27日の2泊3日水俣スタディ・ツアーを行いました。もともと、ゴールデンウィーク直後に行う予定でしたが、新型コロナウイルス感染症が懸念され、特に感染者の多い関西から大勢訪問することが、先方を不安にさせると考え、延期を決定し、この日となりました。ツアー一番の目的は、一般財

団法人水俣病センター相思社(以下、相思社)を訪ねること。以前、相思社職員の永野三智さん一行が、お仕事ついでに交流の家に立ち寄ってくださったことで知り合い、その縁で相思社を訪ねた、ということが事の経緯です。

相思社は水俣病被害者に係る問題について相談に応じ、その解決を図るとともに、水俣病事件に関する調査研究を推進し、その成果の普及・活用を努めることを目的に、1974年に設立されました。具体的には水俣病を伝えるための講演会やまち案内、「水俣病歴史考証館」の運営、機関誌『ごんずい』の発行、水俣病関連の資料収集・整理などを行っています。ちなみに『ごんずい』とはナマズの仲間、毒とげをもっており、これに刺されると激痛に襲われます。ただ、毒を持っていますが、それを避けて食べると大変おいしいそうです。毒とおいしさが同じ個体に共存することが、一つの地域や個人の中に差別の加害と被害の両側面が共存する水俣病の問題と重なり、機関誌に『ごんずい』と名付けたそうです。

私にとって初めての水俣、何よりも印象に残ったのは、自然美と、人の素朴さでありました。相思社までの道中、「霧島茶」という看板や、実際の茶畑、点在する温泉表示と、田畑の縁に沿って満開を迎える彼岸花をたくさん目にしました。なんでもない道で警察の検問に出くわすのですが、地元の中学生在がボランティア体験授業の一環なのか、「交通安全に努めてください」という声掛けと一緒に、車中の人、一人一人に梨やお茶などを渡してくれ、私たちの心をほんわかさせてくれた一幕もありました。

相思社の建屋は、住宅や農地がある中、少し坂を上った丘の中腹にあります。私たち一行は鹿児島

島空港からレンタカーで相思社へ直行、夕暮れ頃に到着しました。夕食までの間、各自ゆっくりすることにしました。私は、周辺の散策をしたり、NPO法人むすびの家の湯浅進理理事長が準備した相思社や水俣病に関する新聞のスクラップ記事を読んだり、ダイニングキッチンにあった本を手にとってみたりします。

相思社集會棟(宿泊施設でもある)から玄関を出ると、不知火海を一望でき、この日は、穏やかな海と水平線に沈みかけた太陽と、とても美しい景色が広がっていました(5頁写真上)。田舎町らしく、町内放送が流れ、長島の愛生園や光明園の景色や雰囲気とも重なり、ゆったりとした時間の流れ、哀愁と素朴さが混ざり合った空気は、心の奥に潜む原風景と重なるようです。

『みなまた海のこえ』という絵本を取りました。文章は『苦海浄土』でも有名な石牟礼道子さん、絵は『ひろしまのピカ』でも有名な丸木俊・位里さんによって描かれたものです。この時、時間をかけてじっくり目を通したわけではないですが、印象として、美しい自然と豊かな海、そしてそれらを誇り、こよなく愛する水俣住民の心が強く伝わってきました。

翌日の「まち案内」の終着の地、茂道の景色を見て、その印象は、益々確信に近づきます。こよなく愛した水俣の自然や海が、1950年代より明るみに出た水俣病によって、激しく汚され、住民たちの心は深く傷ついたことが想像されます。

集會棟に真っ先に作られたのは仏壇であると言います。仏壇には122体のお位牌が眠ります。どうして仏壇を作ったのか、真っ先に考えられたのは、患者さんたちがいつでも安心して帰ってこられる居場所であったからだと言います(5頁写真下)。私は、差別されるかもしれないという人

の不安や恐怖、孤独を思いながら、また、本来帰るべき場所に、帰りたくても帰れない人の気持ちを考えながら、122体のお位牌に向かい、手を合わせました。

初日の夜は、相思社の職員の永野さん、葛西さん、辻さん、前から大塚に縁が深く有有限会社「ガイヤみなまた」で仕事をしている高倉敦子さん、水俣病資料館職員の高平さんらによって、たくさんのおいしい手料理をふるまっていたいただき、たいへん贅沢な接待を受けました。

◇ 2日目の朝から、本格的な案内を受けました。水俣病歴史考証館、大崎ヶ鼻、チツソ正門前、百間排水口(表紙写真)、水俣湾埋立地、茂道と、車で移動しながらめぐります。

案内役は永野さん。この2日目の9月26日は偶然にも、熊本および新潟水俣病の公式公害認定日という説明から案内は始まります。1968年9月26日、「チツソ水俣工場がアセトアルデヒド製造工程で副生されたメチル水銀を工場排水とともに排出し、それが魚介類に蓄積、これらを地域住民が多食することで患う病」という政府の公式見解が発表された日です。

公式見解が出される目前に、チツソ水俣工場は水銀を触媒としたアセトアルデヒドの製造をやめており、図ったように出された公式見解でした。相思社の計算では水俣病患者は20万人いるとみています。うち、1956年に病気の発生が公式に確認されてからこれまで、実際に政府へ認定申請した人は2万3千人ほどと限られ、さらに認定を受けることができた人は2千200人余りにすぎません。症状や居住地を限定したため、さらに、多くの人々の認定申請が棄却されたためです。

永野さんより、水俣病により突然亡くなった父

親の仇を討つため戦われた釜時良さんのことが紹介されました。水俣病の存在を認めさせ、補償を勝ち取る運動をつづけた釜さん。父親は「苦海浄土」でも実名で登場する釜鶴松さん。地元の網元で、父のせいで水俣病が地域で広がってしまったということ、釜さんはひどい差別を受けました。釜さんの息子も水俣病になり、学校でひどいじめにあいました。その過程で、釜さんは地域に対して強い恨みを持つようになりました。そのさなか、運動にも参加せず、1966年、政府による強制的な和解勧告により、補償を得られるようになった途端、これまで自分たちを虐げてきた人たち、やすやすと「患者」（補償を受ける条件として、患者認定しないという和解案であったことから）「表記していません」になっていく人々を見て、さらには、認定証明するために、釜家から魚を買った、もらったという証明書を書いてくれと、訪ねてくる人たちを見て、釜さんはどれだけ悔しい思いをしながら、その人たちを見てきたのだろうか、どれほどの恨みを抱えたまま亡くなったのだろうか、説明のさなか、永野さんの目にも涙が浮かんでいるように見えました。

水俣病の元凶、「チツソ」正門前へ。正門前には、患者相談に応じるという建前で、患者センター分室があります。正門の外です。患者らは社内に入れてもらえず、接見する担当者も60歳を過ぎた嘱託社員にゆだねるといふ扱い。この対応から、真摯に問題に向き合い、反省し、解決を志す姿勢が企業側にあまり感じませんでした。加えて、チツソは2011年、全事業をJNCへ譲渡し、今は同社の事業収益を活用し、水俣病の保証業務に専念する企業となりました。事業譲渡には、当時のチツソ会長の発言から「十分に贖罪を行った。そろそろ社会的制裁の呪縛から解放されてよい」という意図があることが明確です。

ここまですと、悪の根源「チツソ」をいかに叩き潰すが、水俣病問題の解決の道筋と考えられます。しかし、「ごんずい」のように、この問題には複雑な事情があります。

◇ チツソは日本でも代表的な総合化学メーカーとして、石けん、化学調味料などの日用品から工業用品、戦前は火薬などの軍需品まで製造していました。事業譲渡された完全子会社のJNCは現在、液晶を代表的な製品として、有機EL、化粧品・医薬品や食品添加物の原料、有機シリコン化合物、香料などを製造しています。一見では分かりませんが、実は私たちの生活の隅々まで同社の製品は使われ、日々の暮らしに、切っても切れない存在となっています。

水俣市民2万人。うち、JNC(以下、「チツソ」とする)の社員は、なんと2千人、市税の30、40%がチツソ関連の納税となっているという構造が現実存在します。かつて水俣では、不知火海のことを「米びつ」と表現し、魚介類が、庶民の主食とされるほどの、豊かな海洋資源が暮らしの中心にありました。しかし、明治末期にチツソ水俣工場が建設され、田畑を持たない小作人らの多くがチツソの工員となり、その後も企業は拡大、水俣市はいつの間にかチツソの城下町となりました。

まち案内最終地、茂道へ。ここはリアス式海岸と陸が隣接したところで、地理的条件から、住民以外が足を踏み入れることの少ない地域です。公式確認前から流産・死産や原因不明で無くなる人が増え、「奇病」患者として周囲から忌避されました。補償がないことから貧しい家庭だけでなく、網元の家庭ですら生活苦は深刻で、魚介類を食べざるを得ない状況にあったと言います。

永野さんのお話を聞いていた時、通りかかった住民の方とも少しお話しすることができました。外見上、まったく分かりませんが水俣病を罹患された方でした。その方は途中離れることはありましたが、定年を迎えるまでの長年、チツソの職員として働かれました。チツソは被害補償の一環として、特に、行政補償が行き届かない患者に対して、自社への就業斡旋という形で「補償」を行っていました。この方もそれで就職され、チツソが生活を支えました。まさに、個人の中に、被害側面だけで語れない、「ごんずい」を見た気がしました。化学工業は日本の基幹産業として、人社会の利便性を向上させるものとして、発展してきました。それに頼り、目を奪われた結果、水俣病が起きたと思います。定義は簡単ですが、今や化学が人社会になした貢献は大きく、簡単に切り離せるものではありません。私自身、生活の利便性を化学に支えられ、また、職業柄経済的にも大いに支えられている現実があります。チツソとは幸い、直接的な取引はないですが、関係会社とは、取引の関係があったりもします。

◇ 福島第一原発汚染水の海洋放出がまさに始まるうとしています。今回のツアーを通じて、この問題がより自分事のようにとらえられるようになった気がします。日本政府は2050年までにカーボンニュートラルな社会を実現すると発表。そのために、原子力を重要な電源として位置づけ、社会に波紋を起しています。同じ歴史が繰り返されるという直感はあるものの、一方で、功罪ともに関わり、なかなか抜け出せそうにない矛盾を抱えたまま、暮らしや社会は、いかにあるべきなのか、この難問を解く本質的な模索は長く続いていると思います。(写真・青山哲也)

あじさい日誌

11月8日 祝会中止を存知なかったようで、久しぶりに長谷川玲子(福岡県北九州市)・サヒるみ子さん(石川県金沢市)と、また京都の加納夫妻が来島。11月15日 朝9時から奥津斎庭の神籬の「龍神(金剛大龍王)さんの寢床」の藁敷き神事が行われました。

午後2時から大倭神宮月次祭。11月22日 静岡県袋井市の石垣雅設さんご一家3人が来島、大

倭会館で一泊されました。野草社刊『ことむけやはす』やわらぎの黙示』新版の発行について大倭印刷(株)と打合せのためとのこと。

11月23日 大倭大本宮月次祭。昭和41年11月23日月次祭法話をお聞きしました。この日発行の本紙に「神ながらの秘法」いつの間にか自然に」として掲載分でした。

午後4時から大倭会館で大倭会幹事会。12月4日 大倭神宮金鶏祭。12月5日 午後6時から大倭会

館で大倭町自治会の役員会。12月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。大倭安宿苑では

11月19日 合同防災避難訓練。(菅原園)

11月4日 ほぼ全員がインフルエンザ予防接種。

11月14日 感染症の対策をしつつ職員も一緒にカラオケ。

(須加宮寮) 11月17日 地域清掃、旧須加宮寮跡地周辺を14名と職員で。

11月23・26日(デイ) 作品作り(長曾根寮)

新年のご挨拶を申し上げます

太陽は万物一切に無限の光や熱を注いでいるが、万物一切に何一つの要求もない、一粒の種を大地に蒔けば百倍からの実となって人に与えている。

これが神の心である。この神の心は、万物一切吾人間にも包蔵しているもので、素直にこの神の心をもって生きる時、そこに神の恵みがあり幸福がある。

人間は理智があるためこの神心が時々曇るものであるが、曇れば曇るほど人心悪化、社会は混濁する。ここに神の怒りに触れ天災地変の現象をもつてみそがれるのである。

宗教の必然性もここに存するゆえんで、各個人個人の神性の發揮が社会平和、幸福への重要な役割にあることを知るべきである。(昭和二十四年二月三日)

野草社『やわらぎの黙示』67頁より
聖歌『くにものもと』第三節に「濁世の嵐 吹き荒ぶ……」とありますが「コロナの嵐」はどのように、受け止めるべきでしょうか。

大倭七十七年 元旦

宗教 大倭 教長 矢追 家麻呂
法人 大倭 教長 矢追 家麻呂
紫陽花 邑人一同

で「クリスマスリース」。11月30日(特養)ベランダで順番に外気浴で木々の鑑賞。

(茂毛路園) 11月27日 参加5名で施設長と定例懇談会、「コロナが収まれば……」の話題。

12月1日 八重垣園創立25周年記念日で、昼食はお赤飯と好評の一人鍋、紅白饅頭。

11月号について

▼新潟県佐渡市 大滝哲也

菅野弘子さんが帰幽されたとのこと。1979年から紫陽花邑でお世話になっていた私は、

他の独身の方々と共に大倭会館の食堂で三食頂いていましたが、毎年冬になってテーブルの上に登場するのが菅野さんの自家製キムチでした。始めは辛いと思いましたが、慣れてくると美味しくバクバク食べるようになりました。使われている食材がいろいろあるようだし手間もかなりかかっていると思うので、今考えとかなり驚かされても良かったと思います。その後、大阪の鶴橋の焼肉屋さんの突き出しとか、商店街で買って食べたりましたが、菅野さんの味を超えるもの(あくまでも個人的味覚)には出合っておりません。

▼北海道小樽市 守谷明宏

「神通力如是」の時はお題目、

南無妙法蓮華経なんです。それが「奈母太加天腹」になったのは何故?何時から?とか、興味深く読んでます。

▼青森県弘前市 石田勝利
電話で「11月号7頁の金澤秀光さんの住所を教えてください。金澤さんの了解を得てお知らせしました。

あんない

*年始祭(大倭神宮) 1月1日(祝) 午後2時から大倭神宮にて。

密集・密接を避けるためご配慮・ご協力のほど、どうぞよろしくお願い致します。

*月次祭(大倭神宮) 1月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会 1月10日(日) 中止とします。

*大とんど 1月11日(成人の日) 午前9時30分より大本宮西の齋庭にて。注連縄や門松等を火にあげる神事です。当日の天候により日時を変更する場合があります。

針金・プラスチック等、不燃物は必ずはずしてきて下さい。

*月次祭(大倭神宮) 1月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮) 1月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。